令和５年（２０２３年）夏号

阿伎留通信

公立阿伎留医療センターは、医の心を重んじ、患者の生命と健康と生活の質を考える良質の医療を実践し、地域医療の最適化に努力します。

今回の阿伎留通信は、「川崎病」をテーマに小児科　並木 秀匡　医師よりお話しさせて頂きます。

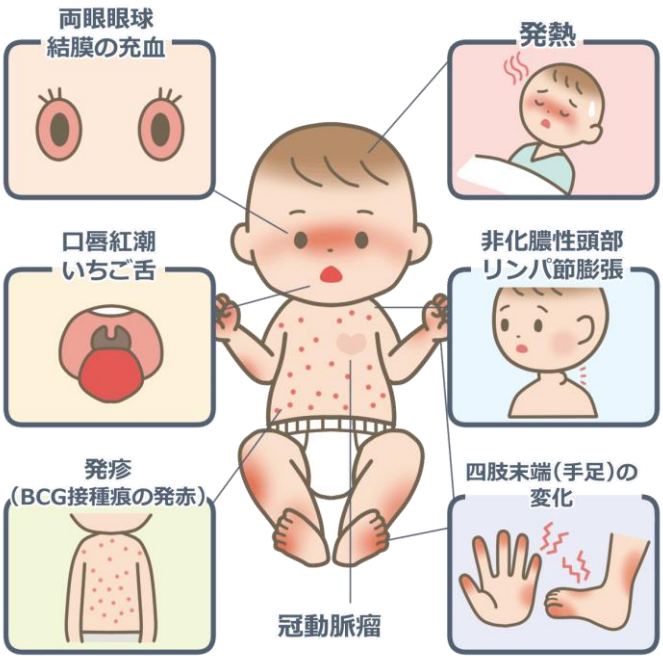
子供がかかる病気の１つに川崎病があります。大事なことは,

【１】発熱が長引く時には川崎病かもしれないので、小児科を受診してください。

【２】なぜなら、川崎病に罹患するとまれに、心臓を栄養する血管である冠動脈に後遺症をきたすことがあるからです。

コロナウイルスと川崎病に関連が有るのか無いのか、ニュースや新聞で取り上げられご覧になられた方もいると思います。川崎病についてどんな病気かなど順に説明します。

川崎病は①発熱、②目の充血、③唇の赤み・苺のようにブツブツとした舌、④首のリンパ節の腫れ、⑤体の発疹・BCG 接種部位の赤み、⑥指のむくみ・手のひらと足の裏の赤みなどが症状として現れます。上記全ての症状が出る子供もいれば、そのうちのいくつかだけの子供もいます。途中からだんだん症状が増えてくる子供もいれば、経過の中で症状が出たり消えたりする子供もいます。ふだん、病気の子を見慣れている小児科医でないと判断できないこともあるので、発熱が長引いている時には受診をおすすめします。



症例写真

日本川崎病学会ホームページから転載

重大な合併症として川崎病にかかった子供のうち数%に、冠動脈にこぶ（冠動脈瘤）が生じます。冠動脈瘤が生じると後々、冠動脈が細くなったり、冠動脈瘤内に血栓が生じたりして、狭心症や心筋梗塞のリスクになるとされます。冠動脈の炎症は発症から 1 週間頃に起こり、それから冠動脈の拡張が始まるとされてます。発症早期では症状が明らかでなく、川崎病とわからないことも多いです。やはり発熱が長引く時には小児科を受診していただき、遅くても 1 週間より前に診断と治療ができることが望ましいです。

コロナウイルス流行初期頃から、海外では、コロナウイルス罹患後に川崎病様症状をきたす子供の報告が多数ありましたが、日本では少なかったです。ただ、コロナウイルス流行の波を経るごとに、子供のコロナウイルス罹患者は増え、川崎様病症状のある例もみられるようになりました。

コロナウイルスに罹患して 2-3 週間ほどしてから上にあげた川崎病様症状や、腹痛・嘔吐・下痢などの消化器症状、循環不全、呼吸不全、腎障害などの多彩な臓器に症状が出現します。現在、小児 COVID-19 関連多系統炎症性症候群(MIS-C/PIMS)という病名をつけて日本での罹患者数や合併症の有無などを調査中です。(エムアイエスシーまたはミスシーということが多いです。) 川崎病も MIS-C もまだよく分かっていないことが多い病気ですが、適切なタイミングで小児科を受診し、診断、治療と繋げることが大切です。

今はネットからの情報が多く、これら以外の病気についても色々と不安のある方も多いと思います。実際に診察室に来ていただいてお話しし、子供のことについて一緒に診させていただけたらと思います。

公立阿伎留医療センター　患者サービス改善委員会　発刊

阿伎留通信については、公立阿伎留医療センターのホームページで御覧になることができます。（https://www.akiru-med.jp/outpatient/akirunews）